

# 本を選ぶ

NO.425 2020年(令和2年)10月20日

●発行／ライブラリー・アド・サービス

<http://www.las2005.com>

本社 〒335-0004 埼玉県蕨市中央 5-20-1 TEL=048-432-3726

●<ろん・ぼわん>母型

●『イワンの馬鹿』『訳者あとがき』のあとがき

●『あるひあるとき』にこめられた願い

●「なぜ?の気持ちを持ち続ける」

●鳥の目 81

●●●●●ろん・ぼわん●●●●●

## 母型

スウェーデンの首都ストックホルム郊外ユールゴーデンにスカンセンという野外博物館がある。工業化される以前の北欧の伝統的な暮らしをできるだけ忠実に再現した魅力的な施設で、19世紀頃を模した農場とか小さな町を復元したつくりになっている。実際に当時のいでたちの鍛冶職人が鉄を打ったり、ガラス工房ではガラスを吹き、革をなめして靴を作り、薪釜で焼くパン屋もあって当時のさまざまな生活技術を実演してみせる。その一角には印刷工房があって、活字を組んだ原版刷りを実演したり、簡単なカードや名刺などの小さな印刷工程が体験できる。

21世紀になって印刷のほとんどがコンピュータ制御のオフセット印刷に替わり、活字組版を用いた凸版印刷は激減した。またワープロが普及して以来、活字はフォントと呼ばれ、活字と書体の区別も曖昧なまま語られることが多い。本来はデジタルフォント（仮想的な活字?）と言うべきだが、もはやフォントとは鉛合金で作られた昔ながらの印刷活字を意味せず、活字は活字そのものではなくなくなってしまったかのようだ。

40年ほど前の話になるが、東京の神田周辺には活字の元を扱う店がまだあった。活字の母型屋さ

んだ。イワタ母型が有名だ。母型は形から言えば凹版となる。その母型から凸版となる活字が作られる。母型屋の店先の棚には客である印刷所から予め注文を受けた活字母型が引き取りを待って並んでいた。当時、活版印刷所には母型筆筒があって、書体毎に号数活字とかポイント活字とかの大きさの異なる活字母型を多数揃えていた。珍しい文字の母型や足りなくなった母型を補充するために、活版印刷所にとって母型屋さんは欠かせない存在だった。

印刷所では、活字の元であるこの母型を用いて不足した活字を1本1本鉛合金で铸造するのだ。職人たちは、活字を鑄込む、と言っていた。さまざまな書体やサイズの活字を幅広く在庫して、小規模な印刷屋に売る活字屋もあった。

関西では母型とは呼ばず字母じぼというのが一般的だと聞く。さらに、母型あるいは字母と言うからには大元となる父型もあつたらしい。一旦凸型の父型を起こして母型をつくり、母型に鉛合金を鑄込んで活字をつくる流れとなる。そのうち、直接母型を彫り込める彫刻機が開発されてからは、工程が簡便になったという。

スカンセンには、パッタンパッタンと頁物を印刷する小型の印刷機の傍らに、さらに小さな機械があつた。いわゆる手キンである。手キンとは、ハンドプレス即ち卓上の小さな機械で、カードや名刺などを刷り出すこの手動の印刷機を日本ではそう呼んでいる。今でも活字組版印刷の魅力をこよなく愛する人たちによって存続している。(埜村 太郎)

# 『イワンの馬鹿』「訳者あとがき」のあとがき

小宮 由

この度、ロシアの文豪レフ・トルストイの民話『イワンの馬鹿』の新訳を担当することになり、紆余曲折の末、上梓することができた。本書は、スイスの有名な画家ハンス・フィッシャーが挿絵をつけ、巻末に、解説・訳者あとがき等の書き下ろしや、作品に関係する文献が収録されている。物語の紹介を含め、これらの説明だけでも、この紙面に収める自信がないのだが、その上、この本の推薦文（帯文）を立命館アジア太平洋大学学長の出口治明先生から寄せていただいたことであったり、デザイナー櫻井久氏による題箋貼りという手法をほどこした素晴らしい装丁のことであったり、一昨年、本誌の同コーナーに寄稿されたアノニマ・スタジオの村上妃佐子氏による熱意ある編集のことであったりと、この本について書く要素は枚挙にいとまがない。裏を返せば、故人、生人間問わず、上記に挙げた人物や、それ以外の多くの方々の尽力により、本書が誕生したといっている。

そこでここでは、巻末に収録している「訳者あとがき」の一部分、私と北御門二郎とのことについて書かせてもらうことにする。もし、読者にとって興味のポイントが別のところにあるならば、直接、本書にあたっていただければ幸いである。

北御門二郎というのは、私の祖父であり、もう一人の『イワンの馬鹿』の翻訳者だ。祖父は第二次世界大戦下での良心的兵役拒否者であり、トルストイ文学の翻訳家としても知られている。

祖父は、17歳の時、トルストイの作品に出会い、以来、絶対的非暴力の思想に目覚め、25歳の時に死を覚悟して兵役を拒否。九死に一生を得た祖父は、周囲からの卑劣な非国民扱いや、特別高等警察の監視を受けながらも、家族を養い、戦後、自らトルストイ文学を翻訳し、生涯、世界から戦争や暴力をなくしたいと訴えつづけた。そして、こ

の『イワンの馬鹿』こそが、祖父の人生に最も影響を与えた本だ。詳しくは本書巻末の資料を参照いただきたいが、ちなみに祖父訳の『イワンの馬鹿』は、現在、あすなろ書房版で読むことができる。私も幼少期からそれを聞いて育ってきた。そればかりではなく、いま、私が翻訳家として活動しているのも、根底には祖父、トルストイの思いがあるからだ。



『イワンの馬鹿』／レフ・トルストイ 作／ハンス・フィッシャー 絵／小宮 由訳／A5判／124頁／定価1,760円(税込)／2020年／アノニマ・スタジオ 刊

今回は、そういった中での新訳作業だった。すでに、祖父の良心的な訳があるのに、私が改めて訳す必要があるのだろうか？ 編集者から正式な翻訳の依頼を受けてから、その悩みだけで1ヶ月が過ぎた。そして、いざ、訳そうと決めてからも、もう一度、トルストイと、フィッシャーと、祖父の生き様に身を沈める必要があった。それは、流れのない暗い湖の中に、一人っきりで、もぐっているような感覚だった。とは言え、それは孤独で恐ろしいことではなく、ただひたすら

に、静寂で、穏やかな、故人との対話の時間だった。その湖からゆっくり顔を出し、大きく深呼吸をしたら、私にもう迷いはなかった。そこから一気に翻訳にとりかかった。幸か不幸か、時期はコロナ禍、あまり外部と接することなく、作業に集中することができた。

祖父は、今から約40年前に出した自著に「(将来)『イワンの馬鹿』のさらなる良心的な翻訳が出現するのを『大旱の雲霓を望むが如く』待ち望んでいる」と書いていた。私の訳が、果たしてそうなったかどうかは、読者が判断するだろう。ただ、この本を訳すことによって、これまでよりもまた一歩、私はトルストイと祖父に近づけた気がした。そして、私だけでなく、この本に共感してくれる読者とも手を取り合って、平和な世界への一歩を踏み出せればと願っている。

(こみや ゆう)

# 『あるひあるとき』にこめられた願い

佐藤 友紀子

この7月に刊行した絵本『あるひあるとき』は、児童文学作家のあまんきみこさんが長らくあたためてこられた物語です。この絵本の中で、あまんさんは初めて、ご自身の大連での記憶——大切にしていたこけしのハッコちゃんとの思い出——を絵本の形で語ってくださっています。

あまんさんは、旧満洲で生まれ、大連で子ども時代を過ごされ、戦後、日本に引き揚げてこられました。さまざまなところで書いていらっしゃると思いますが、あまんさんは、ご自身が子ども時代を過ごされた満洲が日本の傀儡の国であり、その地のあたたかな日向の場所で過ごしたことで、そこにいるべきはずの人を寒い日蔭に追いやっていたことを考え続けてこられました。知らなかった、見なかった、聞かなかった、子どもだったは免罪にならない、むしろより罪深い場合さえあると語り、ご自身の中に重さを抱きながら、創作へと向きあわれてきました。あまんさんの作品の中に、日向にいる子どもたちだけでなく日蔭にいる子どもたちへの想いがこめられているように感じられるのは、こうした胸の奥深くにある重さが深く関係しているように思います。

この絵本が刊行された夏、ちょうど戦後75年という節目でもあり、新聞各紙で多くのインタビュー記事が掲載されました。あまんさんは、この重さのためにハッコちゃんとの思い出を作品化することに長く時間がかかったとおっしゃられています。

あまんさんは、戦後、何度も国会図書館へ通い、旧満洲について調べ、何が起きていたのかを調べたそうですが、調べれば調べるほど、自身の体験をどのように作品として語ったらいいのか迷い、筆が鈍り続けたそうです。しかし、昨年春、変化が訪れました。共同通信のインタビューでは、「ふっと『ちいさいわたし』が私から離れた。初めての体験で、私がこの子になるのにずいぶん時間が必要だったの

ね」とお話しされています。実際、あまんさんは終戦時、14歳でしたが、絵本の中では、5歳ぐらいの少女として登場しています。「ちいさいわたし」が動きだし、あの時代に感じた身いっぱいの喜びと悲しみを伝えてくれるようになったのです。

画家のささめやゆきさんは限られた資料にも関わらず、幼い子どもの心、大連の空気のおい、戦争が終わった夏の暑さ、冬の凍えるような寒さ、ストーブの熱い炎など……本質に迫る絵を仕上げてくださいました。最後の天江富弥氏の言葉で締めくくられる見開きは「こけしを五百羅漢のようにちりばめたい」とおっしゃって、美しい青の地にこけしをたくさん描かれました。当時、ハッコちゃんのほかにも、同じような運命をたどったこけしがたくさんいたことでしょう。そんなこけしたちが私たちを見つめているように思えます。あの時代を二度と繰り返してはいけないとい

うお二人の想いが、この絵本につらぬかれています。

絵本を刊行したあと、たくさんの読者はがきやお便りをいただきました。その中には、戦中戦後を大連や満洲で過ごした方からのお便りが多くありました。あまんさんはこけしでしたが、同じような体験の中でお雛様を手放した方もいらっしゃいました。戦後75年は長い年月ではありますが、決して過去ではなく、ある日ある時、いつでもその時代に思いを馳せ、決してあの時代の過ちを繰り返してはいけないと思って生きていらっしゃる方々がこんなにも多くおられることに胸を打たれました。私たちは、そうした方々の想いを受けて、次の世代に伝えていかなければいけない、と改めて思っております。「あるひあるとき」は、子どもたちにとっては少し難しい内容ではありますが、ぜひおとなの方と一緒に読み読んで、戦争の時代について考えるきっかけになれば、と願っています。  
(さとうゆきこ:のら書店)



『あるひあるとき』あまんきみこ 文  
／ささめや ゆき 絵／サイズ270  
×220mm／36頁／本体1,500円／  
2020年／のら書店 刊

# 「なぜ？の気持ちを持ち続ける」

溝上 牧子

どんな場所に行くときも、新しい社会へ飛び込むときにもいろんな「なぜ？」や「おかしな現実」に出会うことがあるだろう。郷に入れば郷に従えという言葉があるが、その場その場、そして国ごとにもルールがある。しかしそれに従うのが当たり前であると思いつまらず、まずはそのことの意味を考えてみたい。それが本当に必要なことなのか。やるべきことなのか。

もちろんよき習慣もあるし、国の宗教上のきまりごともあるから守るべきものもある。しかし悪しき習慣は、その真ただ中にいればいるほどその色に染まっていき、それが通例化して悪い事だと思わなくなる傾向があるように思う。

私の父は真面目すぎるくらい真面目な人で、社会の悪しきあたりまえを許せない人だった。だから、よい友だちにも恵まれたが、多くの人に愛人と思われていた。何かを正そうとするたびにそんな些細なことをと煙たがられた。確かに正しいの基準を少し緩めたらもう少し生きやすくなるだろう。なかなか世の中、白と黒だけにしようと思うと生きにくい。それこそいろんな考えの人たちのより集まりなのだから。人になんとわれようと自分を貫くのは大変なことだ。父とて、さほど強い人でもなく嫌われて嫌な目にあわされれば落ち込み精神状態がおかしくなったりもした。しかしどんな状況であっても、ある一定の姿勢は変わらなかった。子どものころ嫌だと思っていた父のその姿だが、今はだんだんその考えに近づいている自分がいる。

些細な悪しき習慣はそのまま会社や組織の雰囲気として現れることが多い。そして、じわじわと大きな部分にも浸透していく。初めてそこへ飛び込んだ時に覚えた違和感は自分の素直な気持ちだ。だからこそ、その違和感を忘れないでいたいし、その正体を探りたい。慣れすぎる前に。

慣れないものに対して抱く違和感は誰にでもあつた。けれど、「なんだかオカシイ」や、「嫌悪感」を感じたならば、郷に入っても郷に従わないこと

があつてもよいと思う。立ち止まって考えて、自分なりの答えを出したい。

今日の日本もまた、様々な違和感で満ち溢れている。おかしな政治が行われているのに支持率は下がらない。下がってもわずか…なぜだろう？ 実際には報道されてよいはずのことが報道されない…なぜだろう？ 必要な（都合の悪い）書類や記録は捨てられ、明確な回答がなくても政治が進んでいく…なぜだろう？ じわじわと真綿で首を絞められているような閉塞感。実体がどこにあるかもわからない怖さ。最近よく耳（目）にするSGDs = 「持続可能な開発目標」についても同様だ。ここ数年、学校現場でも重要視されてきたSGDs。子どもたちはこのことについて学ぶ。疑問が沸く。では大人は？ 大人が率先して行動しなければ子どもたちには伝わらないのではないだろうか。大人も本気で学び、出来ることを実行する。大人も子どもも一緒に。この17項目について個人が出来ることはなんだろう。本当にこの17項目は必要なことも自分なりに考えてもいい。学校や会社ができることはなんだろう？ 地域で出来ることはなんだろう？ 国が出来ることはなんだろう？ 指示するだけでなく、その指示した人も、一人一人が取り組まなくては世の中は変わらない。誰がアイデアを出してもいい。年上年下も関係ない。役人でもアイデアを出せない人もいれば、間違ふことだつてあるのだから。

子ども時代に大人から教わつた「うそをつかないこと」「間違つたことをしたときには謝ること」「あいさつを交わすこと」「勉強すること」等々。その単純なことを実行するのが実は何より重要だと気づく。いつも気づくのはギリギリの状態になつてから。害獣問題も然り。その言葉の違和感…動物によって人間は害を被っているかもしれない。でもそうなつた根っこは人間だつたりする。地球にとって本当の意味の害獣は人間なのだ…。

(みぞかみ まきこ：朔北社)

# 鳥の目 81

——コアジサシのふるさと 3冊の本——

為貞 貞人

## 地球の巡礼者アジサシ

アジサシは美しい渡り鳥です。カモメに比べてずっと小さく、翼は細く、尾羽が長くツバメのように先が二つに分かれ、真っすぐとがったくちばしをやや下向きに、強く羽ばたいて飛びます。空中でホバリングし狙いをさだめ、水面にダイビングして魚をとらえます。

アジサシはカモメ科アジサシ亜科の鳥の総称で、英名は Tern、世界で 12 属 45 種に分類されます。日本では旅鳥や迷鳥を含め約 20 種のアジサシの飛来が確認され、うち夏鳥はコアジサシ、セグロアジサシ、ベニアジサシ、エリグロアジサシ、マミジロアジサシ、オオアジサシ、クロアジサシで、コアジサシ (Little Tern) が本州、四国、九州などで繁殖し、その他は琉球列島、小笠原群島、奄美大島で繁殖します。

コアジサシは世界で 9 亜種、極東・東アジアでは 1 亜種が、ロシアのアムール川流域から南へ中国南部まで、朝鮮半島、日本列島で繁殖し、越冬地は東南アジアやオーストラリアなどです。コアジサシは全長約 28 cm の小型のアジサシで、頭が黒く、体と尾が白く、背と翼の上面がうすい灰色、夏羽はくちばしが黄色です。

日本では迷鳥のキョクアジサシ (Arctic Tern) は世界で最も長い距離を渡ることによって知られ、成鳥の夏羽はくちばしと足が赤色で、ハトくらいの大きさです。キョクアジサシは 5 月頃集団で北極圏で繁殖し、夏の終わりから初秋に北米・南米の太平洋岸沿いと、ヨーロッパ西沿岸からアフリカにかけての二つのコースで南半球に渡り、夏の南極周辺海域で「越冬」し、繁殖期に再び北極圏へ渡り、片道 1 万 5 千 km から 2 万 km の旅を繰り返します。最新の調査では、一部の個体は緩やかに蛇行して飛び、往復の最長距離がこれまでの推定の 2 倍の 8 万 km に達したと報じられています。

地球温暖化による気候変動が、「白夜を求めて旅をする」キョクアジサシをはじめ極地間の各地を

巡礼する多くのアジサシの渡りや繁殖にどう影響するか注目されます。

## もともとのふるさと

日本で繁殖するコアジサシについては、1973 年から環境庁 (当時) と山階鳥類研究所の足環装着による標識調査が開始され、1975 年 6 月 3 日千葉市幕張の埋め立て地でふ化直後に標識放鳥した鳥が、同年 12 月 9 日、5 千 km 離れたパプアニューギニアのガルフ地方で回収され、越冬地が初めて確認されました。日本で渡り鳥コアジサシへの関心が高まったのはこの頃からです。

1980 年代初め、コアジサシについての自然学習シリーズの 1 冊と児童向けの絵本の 2 冊の本が出版されました。その 1 冊が『カラー版 自然と科学 ④コアジサシの親子』(国松俊英著/岩崎書店/1981 年) です。

「四月の海べです。…海岸の埋め立て地をコアジサシが飛んでいます。東京湾に今年もコアジサシが帰ってきたのです。南半球のオーストラリア、ニューギニアから赤道をこえて」と書き始められ、コアジサシが砂地に茶碗くらいのくぼみに貝殻を敷いただけの巣をつくり、3 個の卵を産み、晴れた日も雨の日も雌雄交代で抱卵し、何度も失敗して海に飛び込んで魚をとる親鳥や、餌とりに出かけた親鳥を待ちわびる砂や小石と同じ保護色のひなが、鮮やかな写真によりわかりやすく説明されています。無事ふ化したひなには生き残るための懸命な日々が続きます。親鳥はコロニーへの侵入者に集団で攻撃し、卵やひなを守ろうと必死です。

これら埋め立ての砂地は数年たてば草地になり、また建造物や交通網の拡張でアジサシなどの渡り鳥の繁殖地や休息地が狭まるので、埋め立て地の一部を保護区にする必要があると、本書では早くも指摘されています。

2 冊目は『コアジサシの母さん (日本のえほん

24)』(文・絵 松原巖樹／小峰書店／1984年)です。5月の明るい日ざしにみち、草や木の花が咲き、鳥や虫たちがいきいきと動き回る川原でのコアジサシの子育てが、シロチドリやヒバリの子育てと一緒に、美しいイラストで語られています。

描かれた場所は神奈川県相模川の広々とした川原です。コアジサシは4月20日頃から姿を見せ始め、5月に川原の石ころをよけた砂地のくぼみの巣にコアジサシの母さんは2～3個の卵を産み、卵は3週間でふ化します。激しい雨や強風、川の増水、川原への犬の侵入やモトクロスのオートバイの脅威、ひんぱんな餌運びなど、母さんたちの心配や苦労は絶えません。そして9月、海辺に集合、群れをつくって渡りの準備です。ひなたちは体はまだ茶色ですがすっかり大きくなりました。群れはまもなく南の国をめざして長い旅に出発します。

以上の2冊はコアジサシの多くが浜辺や河川敷、また広い埋め立て地の砂利の裸地で子育てできた時代の本来の繁殖地が描かれていますが、近年この渡り鳥のふるさとに大きな変化が見られます。その一例が千葉市の「検見川の浜」です。1993年に千葉市が政令指定都市移行を記念してアジサシを市の鳥に制定し、人口海浜「検見川の浜」でアジサシとの共生を目指してボランティアと共にアジサシの繁殖の保護活動を行っています。

しかし保護柵やシェルターの設置にもかかわらず、卵やひながカラスなどの捕食で昨年は巣立ったのは13巣から10羽でした。今年は6月21日に成鳥約300羽、382巣、ひな100羽近くを数えましたが、7月12日には成鳥約25羽、幼鳥12羽、ひな2羽に大きく減少していました。(千葉市HP「令和2年度コアジサシの成長記録」)

## 新しいふるさと

本年9月1日の毎日新聞の「くらしナビー環境」欄に「コアジサシの繁殖地保全急務」と題する記事が載りました。環境省のレッドリストでは絶滅

危惧Ⅱ類(絶滅の危険が増大している種)に分類されているコアジサシは「国内では5000～1万のつがいが繁殖していると推定され、環境省の2011年度の報告書によると、営巣が確認された55地点のうち、45%を造成地や屋上などの人工地形が占めた」と記されています。これはコアジサシの繁殖場所になっている埋め立て地や人工島で、統合型リゾートや博覧会などの会場・施設の大規模建設が進めば、コアジサシは主要な繁殖場所を失うことを意味します。それでは残る屋上などの人工地形の現状はどうでしょうか。

上記の記事で紹介されている東京都大田区のNPO法人「リトルターン・プロジェクト」はその代表的な事例です。2007年5月発行の絵本『月刊たぐさんのふしぎ コアジサシ ふるさとをなくした渡り鳥』(増田直也・文／荒川暢・絵／第266号 福音館書店)は、そのプロジェクトの活動開始から5年間の展開が色彩豊かなイラストで描かれています。

2001年6月10日、筆者の増田さんは東京湾の昭和島での野鳥調査で、魚をくわえたコアジサシが多摩川河口を目指して飛び、水再生センターの建物を越えて消えていくことに気が付きました。コアジサシはこの施設の屋上のコンクリートの広場で営巣していたのです。2002年3月「東京都下水道局森ヶ崎水再生センター」東施設の屋上で都下水道局とボランティアによる人口コロニーの造成作業が開始しました。2ヘクタールの屋上には砂利の代わりに下水道局のリサイクル商品の「スラッジライト」を敷き、その上に貝殻をまいて人工の営巣地ができました。初年の2002年には約2000羽の大集団となり、巣の数1224巣、卵数2665個、巣立った幼鳥606羽を数えました。その後、草原化、猫・カラスの被害などの対策で試行錯誤を重ね、2005年1月に屋上の裸地を6.2ヘクタールに広げ、コンクリートガラや天然砂利に取り換えました。こうして2005年には536巣から、チョウゲンボウの攻撃を受けながら229羽のひなが巣

立ちました。

それから15年目の今年、リトルターン・プロジェクトの「2020年 営巣調査結果まとめ」を見ると、成鳥最大数120羽、総営巣数264巣で、ふ化数4羽、無事に巣立った幼鳥は1羽でした。2002年から19年間の営巣数とふ化数の経年変化では2015年にふ化数が2000羽台に大幅に増加して以来本年まで営巣、ふ化ともに減少が続いています。親鳥の必死の防衛やプロジェクトの対策にもかかわらず、カラスなどの侵入で卵が捕食され、2020年は多くが

繁殖をあきらめ1ペアだけが1羽のひなを懸命に育て、8月8日親子ともども森ヶ崎から姿を消しました。

こうした現状を見ると、13年前に「水再生センターの屋上が、コアジサシにとってほんとうのふるさとになるのは、いつのことだろう」と書かれ「コアジサシ、来年ももどってこいよ！ここが君たちの新しいふるさとだ」と結ばれている絵本の言葉が一層胸に響きます。

(ためさだ さだと さいたま市図書館友の会)